

**アルミニウム技術戦略ロードマップ**  
**2010**  
**(概要版)**

社団法人 日本アルミニウム協会

## 序文

アルミニウムは、日本の製造業の競争力を支える基盤材料としてこれまで重要な役割を担ってきた。地球環境問題解決というグローバルかつ緊急の課題とともに、エネルギー資源に乏しく、また少子高齢化等の課題を抱える我が国が、今後持続可能な経済発展を遂げるためには、省資源や省エネルギーをさらに強力に進めつつ、循環型社会、低炭素社会、安全安心の社会を構築する必要がある。アルミニウムはその軽量性やリサイクル性等に富むことから、その果たすべき役割はますます大きくなるものと思われる。今後アルミニウム産業の日本経済への貢献を一層効率的に推進するためには産学官の連携が不可欠であることは論を待たない。この連携を円滑に効率的に進めるための共通認識としてロードマップを活用することは有用である。

このような見地から、日本アルミニウム協会では昨年度「アルミニウム技術戦略ロードマップ2009」を策定、昨年11月に公表し各方面から大きな反響をいただいた。その内容の一部は政府の「産業構造ビジョン2010」の「アクションプラン」にも取り上げられている。

また、これは当初より軽金属学会のロードマップと補完関係にあることを念頭に検討され、かつ、定期的に見直すことが予定されていた。今回その趣旨に則り、日本アルミニウム協会の「ロードマップ小委員会」にて検討を重ね、「アルミニウム技術戦略ロードマップ2010」を策定した。各界からのご意見、ご鞭撻を賜れば幸いである。

平成22年11月26日  
社団法人 日本アルミニウム協会  
会長 石山 喬



# 目次

はじめに	3
I. アルミニウム産業を取り巻く環境	5
I-1 社会産業の潮流・底流	5
I-2 科学技術の潮流・底流	6
II. 導入シナリオ	7
II-1 市場の動向・マーケティング	7
II-2 ユーザーヒアリング	9
II-3 アルミニウム需要統計	11
II-4 アルミニウム産業の課題	13
II-5 未来のアルミニウム産業に向けて	14
II-6 人材育成・社会への仕掛け	16
III. アルミニウム技術戦略ロードマップ	17
III-1 ロードマップ作成のコンセプト	17
III-2 アルミニウム技術戦略マップ	19
III-3 アルミニウムビジネスロードマップ	20
III-4 アルミニウム要素技術マップ	20
III-5 アルミニウム技術ロードマップ	20
別表1 アルミニウム技術戦略マップ（技術開発戦略の俯瞰図）	21
別表2 アルミニウムビジネスロードマップ（製品開発、プロセス開発のスケジュール一覧表）	22
別表3 アルミニウム要素技術マップ（要素技術と製品分野の関連一覧表）	23
別表4 アルミニウム技術ロードマップ1（技術開発スケジュールの一覧表）	24
別表5 アルミニウム技術ロードマップ2（技術開発スケジュールの一覧表）	25
別表6 アルミニウム技術ロードマップ3（技術開発スケジュールの一覧表）	26
ロードマップ作成小委員会委員名簿	27
（補足資料）	
● 開発目標値の設定	28
● 技術キーワード個別ロードマップ	31

## はじめに

今後のアルミニウム産業の研究開発の方向性を示すため、昨年、社団法人日本アルミニウム協会としてロードマップを作成・公表し、大きな反響があった。本ロードマップは軽金属学会のロードマップと補完関係にあり、また、定期的な見直しを予定しており、本年度最初の見直しを行い「アルミニウム技術戦略ロードマップ2010」としてまとめた。昨年から一年間のアルミニウム産業を取り巻く環境の変化、関連テーマの進捗等最新の状況を折り込んだ。関係各界からのご意見を賜れば幸甚である。

### 1. 日本のアルミニウム産業の課題

日本のアルミニウム産業は、2度のオイルショックで、製錬業が壊滅し、ほぼ全量輸入に依存する地金をプロセス処理する業態が主となっている。また、ユーザーのきめ細かい品質の要求に応えるべく、多品種少量ロットによる生産形態をとっているため、原料調達コストの高さも相俟って、国際競争力維持に課題があると言われている。

また、現在添加元素に用いられている銅、亜鉛、マンガン、マグネシウムといった、今後地金価格が高騰する可能性のある枯渇元素や、ある特定国への依存度が高い金属があり、生活に欠かせない基礎材料としての供給安定性や信頼性が損なわれる懸念がある。

### 2. 未来のアルミニウム産業の発展に向けて

#### (1) 弱みを強みに変える技術開発

新地金を全面的に海外に依存していることによる原料コスト面の劣勢を、今後ますますリサイクル率を向上させることにより軽減する（総需要450万tに対して75万t回収量を増加、現行300万t（合金を含む）の輸入量の内75万tを削減）。このためには、リサイクルの技術革新を図り、かつスクラップを上流工程に円滑に戻す社会システムを構築し、リサイクルコスト低減を実現する。これにより、原料費のコストダウンが図られるとともに、海外製錬への依存量を減らすことによる二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）の抑制で地球温暖化問題の解決にも貢献できる。

添加元素の枯渇や特定国への依存度の高さといった問題については、ナノテクの活用で添加元素量低減（少ない添加元素量で性能維持）を図り、また、さらには添加元素を豊富に賦存する鉄、シリコン等のユビキタス元素に代替し、かつ性能優位性が獲得できるような合金組成に仕上げるための研究開発を推進し、国際競争力を高める。

#### (2) アルミニウムの需要拡大を目指した研究開発

アルミニウムを使った製品としては、熱交換器、リチウムイオン電池（LIB）のケース及び正極、ハードディスク（HD）基板など、世界市場でNO.1を誇るものが種々ある。しかし、アルミニウムというリサイクル性に優れた素材の利用を拡大し、循環型経済社会の構築

にさらに貢献するためには、その利用拡大のための技術開発を強力に推進する必要がある。一例として、電気自動車（EV）の普及への対応については、EV車は車体の軽量化が走行距離の延長という点で極めて重要な意義を持つため、アルミニウム材料の採用に向けた技術開発を強力に推進する。EVのほか自動車関連では、燃料電池自動車（FCV）、LIB、絶縁ゲート型バイポーラトランジスタ（IGBT）などがある。

自動車関連以外の新しい用途領域への進展については、クラウド・コンピューティングなどの情報通信技術（ICT）、ICTと電力ネットワーク（スマートグリッド、環境共生スマートシティ、次世代エネルギー社会システムの実証プロジェクト）と新産業としての植物工場・次世代農業等が展開されており、この領域へのアルミニウム材料の用途開発を推進する。

ライフサイクルアセスメント（LCA）の見地からは、毎年日本アルミニウム協会の環境自主行動計画報告書に記載されているように、アルミニウム材料の製造段階でのCO<sub>2</sub>排出量に比較して、アルミニウム材料を自動車へ使用し軽量化することによる走行時のCO<sub>2</sub>削減量の方が数倍大きく、アルミニウム材料の需要拡大は社会全体のCO<sub>2</sub>排出抑制に大きく貢献できる。

### （3） 人材育成の強化

アルミニウムは日常生活に欠かせない金属材料であるが、最近の学生の理系離れやこれまで産業を支えてきたベテランの団塊世代の人材が定年を迎えることもあり、蓄積された経験やノウハウの伝達は重要な課題である。このような背景にかんがみ、日本アルミニウム協会では金属系材料研究開発センター（JRRCM）と共同で経済産業省の委託事業として3年間（平成19～21年度）に亘り、アルミニウム産業の研究・技術を担う人材の育成を目指す「中核人材育成プログラム」を開発してきた。そして、その完成したプログラムを用いて、平成22度より日本アルミニウム協会「中核人材育成講座」を開講した。このプログラムは、大学の学問とアルミニウム産業の製造技術の融合、材料系学問と機械系学問の融合、そしてアルミニウム企業間の技術の融合という3つの融合により完成したものであり、中堅研究者・技術者の系統的な教育の推進が期待される他、院生を中心とした大学生の啓発にも活用されることが期待される。

## I. アルミニウム産業を取り巻く環境

日本のアルミニウム産業を取り巻く環境は、経済のグローバル化の進展により、大きく変化してきている。日本経済は、国民総生産（GDP）世界第二位の規模にまで成長を遂げたものの、様々な課題に直面しており、今や中国等をはじめとする新興勢力にその座を譲ろうとしている。量的な尺度としてのGDPは国民の幸福とどれほど関連するかという疑問はあるが、これまで「ものづくり」で経済成長を遂げてきた日本がグローバルな競争が激化する中で、引き続き世界の先進国として生き残っていくためには、これまでとは違った新たな視点による戦略の遂行が必要となっている。

特に、近年その問題の解決が急務となっている地球温暖化問題の解決のためには、省エネルギー・省資源で世界をリードしてきた日本への期待は高まっている。

また、少子・高齢化問題にしてもその課題解決をだれよりも先に迫られているという意味でも、日本は先進国であり、これら課題解決のためにリーダーとして果たすべき日本の役割は大きい。

現在の産業界は未曾有の金融危機に端を発した不況から、緩やかな回復基調にある。日本のアルミニウム産業においても、需要は9割方回復したといわれているが、危機発生以前の水準までいつ回復するかについては、不透明感が拭い去れない現状である。一方、中国をはじめとする新興国の成長は引き続き堅調であり、今や世界の経済を牽引する勢いである。日本アルミニウム協会が発表した世界の新地金の需要見通しでは、現状の3,800万トンが2020年には7,400万トンと試算されている。この約6割弱を中国が占めるとの推定である。また、2020年に世界で約1,000万トンの供給不足が懸念されている。この他にも以下のような潮流や底流の変化があり、このような変化に適切に対応した取り組みが必要とされている。

### I-1 社会・産業の潮流・底流

#### (1) 低炭素社会への貢献：

地球温暖化問題の解決はまったなしの対応を迫られており、また化石燃料はいずれ枯渇するとも言われていることから、より一層の省エネルギーの推進及びCO<sub>2</sub>を排出しない再生可能エネルギーや原子力エネルギー等の利用推進が求められている。

#### (2) 循環型社会への貢献：

資源・エネルギーに乏しい日本は、その殆どを輸入に依存しており、資源・エネルギーの安定供給確保の観点からも一刻も早い循環型社会システムの構築が課題となっている。そのためにも、都市鉱山とも言われる廃棄家電製品や情報化製品に含まれる有用金属の回収技術や高度なりサイクル技術の確立が必要とされている。

(3) **安全・安心社会への貢献：**

2010年4月1日現在の日本の人口1億2700万人の中で23%が65歳以上であり、これが2050年には人口は1億人で65歳以上の人が40%に達すると予測されている。このような状況の下では、医療、介護、福祉等の負荷が相当高まるものと予測され、遠隔医療システムや介護福祉ロボットの開発など社会システムもそれに対応して整備されていく必要がある。

**I-2 科学・技術の潮流・底流**

(1) **2005～2010年：第3期科学技術基本計画の実態と反省**

日本における材料開発は世界最高水準のレベルに達していると言える。またナノテクでのシーズや元素戦略・希少金属代替ではそれなりの成果が出ているものと考えられる。しかし材料分野の成果は見え難く、金属・無機・有機の融合等が課題として指摘されている。

(2) **2011～2016年：第4期科学技術基本計画へのアルミニウム関連研究テーマの玉だし**

科学・技術・イノベーション政策を、他の重要政策と密接な連携を図りつつ、官民の総力を挙げて推進することを基本方針に、基本計画の検討が進められている。グリーン・イノベーションとライフ・イノベーションを大きな柱とし、科学・技術が成長を支えるプラットフォームと位置付けられる。アルミニウムは科学・技術を支えるベース材料であり、蓄電池、次世代自動車、医療機器、介護機器など出口を見据えた新たな材料、利用技術の提案が求められる。

(3) **経済産業省産業構造ビジョンとアルミニウム技術戦略**

2007年及び2008年の経済産業省技術戦略マップに、アルミニウム関連研究開発テーマが掲載されず、その展開での国家プロジェクトが、アルミニウム関連では5年間皆無に等しかった。この様な状況を反省して策定された、「アルミニウム技術戦略ロードマップ2009」は、平成22年6月に公表された経済産業省「産業構造ビジョン2010」のアルミニウム産業のアクションプランで取り上げられた。そこでは取り組む具体的施策として、i) アルミの特性を活かした成長分野の需要開拓、ii) 新興国需要の取り込み、iii) 高度なりサイクルシステムの実現、iv) アルミ資源の安定調達、v) 企業基盤の強化が挙げられ、実現に向けて革新的な技術開発の取組が求められている。

## II. 導入シナリオ

数多く存在する物質の中で、実際に利用されるものが材料であり、「使われてこそ材料」が本質である。そこでマーケットイン志向から、未来の想定とユーザー業界ヒアリングを継続的に実行することにより、市場の潜在的なニーズ動向を把握しアルミニウム新用途・新技術探索に反映することとした。

### II-1 市場の動向・マーケティング

#### (1) 自動車の未来

地球環境問題の解決に向けて、自動車に関するCO<sub>2</sub>排出規制を強化する動きがあり、燃費の向上に向けた車体の軽量化とともに、EVやハイブリッド車（HV）の本格的普及が期待されている。特にEVには最も大きな期待が寄せられているが、蓄電池の効率をあげるためには、車体の軽量化は喫緊の課題であり、ガソリン車やディーゼル車も含めアルミニウム合金の自動車への利用は今後ますます増えていくものと期待されている。

EVについては、2009年にEV/PHEVタウン構想により、8地域での実証事業と3地域での調査事業が実施されている。それを受けて、経済産業省が発表した「次世代自動車戦略2010」においては、乗用車の新車販売台数に占める次世代自動車の割合を2020年に20%~50%、2030年には50%~70%にするという目標がたてられている。また、インフラとしての充電器インフラ実証プロジェクトも進んでおり、2020年には普通充電器200万基、急速充電器5000基の設置が予測されている。

さらに、バスやトラックを含む自動車以外にも、鉄道、バイク、自転車等において電化と軽量化という観点からアルミニウムの利用が期待されている。

#### (2) 住宅の未来

未来の住宅は、省エネルギー及びゼロエミッションを徹底して目指すことが求められており機能材、高強度構造部材としてのアルミニウムの地位の確立が期待される。スマートメータを含め、スマートハウスでの系統電力とEVや再生可能エネルギーとの連携および発光ダイオード（LED）普及も踏まえ、直流化の動きが進展している。エコ住宅への窓リフォーム、壁断熱・気密リフォームへの補助活動も始まっている。

#### (3) 灯りの未来

電球や蛍光灯に変わる第4の灯りとして期待されるLED照明への切替えが、省エネルギーの観点から進んでいる。アルミニウムの優れた加工性と熱伝導性を活かして放熱素材として利用されている。またLEDの基盤自体をサファイアからアルミニウムとセラミックスの複合体とする技術開発も進められている。アルミニウムはLEDに欠かせない素材として、今後の展開が期待される。



#### (4) 家電の未来

テレビ、冷蔵庫、エアコン等の一般家電に加え、安全・安心、快適生活に必要な電気製品の普及が予測される。これら家電製品についても、地球温暖化対策の推進といった観点から、省資源、省エネルギーに資する更なる小型化、高性能化、及び高効率化が求められており、より高機能なアルミニウム材料の開発が望まれる。

また、電力の直流化についてはLED照明が急展開しており、それに相まって、太陽光発電（PV）、LIB、定置型燃料電池（FCB）などのエネルギーの供給サイドの直流化も進みつつある。PVは、FIT政策（Feed-In-Tariff、固定価格買取政策）による普及が需要を支えている。

#### (5) エネルギーの未来

エネルギーの分野においても、従来の化石燃料依存から、CO<sub>2</sub>排出の極小化を図るため太陽電池等の再生可能エネルギーのさらなる導入が期待されており、より高機能なアルミニウム材料の開発が望まれる。

次世代エネルギー社会システム実証プロジェクトが、国の採択4地域（横浜、豊田、京阪奈、北九州）以外に15箇所で動き出している。ICTと電力の融合のスマートグリッド等もその実証プロジェクトで試行されている。

#### (6) ロボットの未来

少子高齢化の問題が深刻な事態になっていくことが予想される中で、介護ロボットや福祉ロボットへのニーズが非常に高まってきている。ロボット構体のベース材料としては、薄肉（軽量）・高強度・高成形アルミニウム材料の提案が望まれる。

#### (7) 食の未来

食文化は経済のグローバル化に伴いますます多様化していくことは明らかである。新しい食品の製造や容器包装の分野で新たな需要が出るのが予想される。また、食料の自給率向上の観点から、植物工場の建設や運転も増加していくことが予想され、意外な需要が出てくることも考えられる。さらに、地震等の緊急時保存用としての米や水を保存する容器に遮光性の観点からアルミニウムの利用が増えることも期待される。

#### (8) 半導体の未来

電化社会、高度情報化社会だけでなく、現代生活のあらゆる面で欠くことのできない電子テクノロジーを支える半導体分野はさらに成長することが予想される。半導体を進歩させるためには、それを作る半導体製造装置の技術革新が必要不可欠となる。半導体製造装置と共通点の多い製造装置として、フラットパネルディスプレイ（FPD）製造装置やソーラーパネル製造装置があり、これら製造装置部門への大型、高精度厚板の提案が望まれる。

#### (9) 情報通信の未来

安全安心、快適な社会の実現に向けて、防災や防犯・セキュリティ、食品・農業、医療・福祉、物流など広範な分野において、ユビキタスセンサーネットワーク構想が取り上げ

られており、2010年で1兆円を越す市場規模が見込まれている。

更に、クラウド・コンピューティングが大きな潮流になりつつある。この場合は、IDC (Internet data center) ~無線・有線~端末 (携帯、IPAD、PC等) の構造のなかで、アルミニウムの新用途が期待される。

#### (10) 医療・介護・バイオ・健康の未来

第4期科学技術基本計画での注力領域がライフ・イノベーションであるが、医療・介護・バイオ・健康領域で、アルミの機能性を活かした検査・分析機器が開発されている。また医療用器具、介護用器具等の軽量化による負荷軽減を目的にアルミニウムの需要が期待される。

#### II-2 ユーザーヒアリング

ロードマップ作成にあたって、アルミニウムを使用するユーザーの業界団体もしくは代表企業に各業界の現状、課題、今後の動向についてヒアリングを行い、目標設定の参考とした。現在時点で完了した分野及びその概要は次表の通りであり、今後もヒアリングを継続し追加していく予定である。

製品分野/ユーザー	ヒアリング項目	課題・要望等
<b>輸送</b> ・(社)日本自動車工業会 (FGCJ 水素構成材料 WG)  ・日野自動車(株)  ・東京電力(株)	・HEV、EV、FCVの今後 ・高圧水素用アルミ材料の課題  ・トラック、バスの今後  ・電気自動車の普及とインフラ整備	・FCVのコスト低減、信頼性・耐久性の改善、 ・高強度アルミ材  ・大型車の軽量化 ・アルミは切欠き感受性が課題 ・材料+構造変更、加工法提案 鋳物、ダイキャストに期待  ・EVのコストダウンと高性能電池の開発 ・軽量化 (ガソリン車に比べ効果大)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>アルミ車両委員会</u> (日本アルミニウム協会)</li>   <li>・ <u>三井造船株</u></li>   <li>・ <u>日産自動車</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 鉄道車輛の未来</li>   <li>・ アルミ材の船舶への適用の可能性</li>   <li>・ 電動車両用モーターの概要と巻線について －モーター巻線のアルミ化を目指して－</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 疲労強度、検査方法 接合部の信頼性が課題。</li> <li>・ 大断面の押出材開発</li> <li>・ 高剛性、高減衰性材料開発</li> <li>・ 形材の形状、サイズの規格化 (モジュールの統一)</li> <li>・ リアモーターの軽量化</li> <li>・ リサイクル推進</li>   <li>・ 溶接部の強度低下対策 疲労強度向上、耐食性向上</li>   <li>・ 導電性の確保</li> </ul>
<p><b>建築・土木</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>清水建設株</u></li>   <li>・ <u>佐々木設計事務所</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TRY2025 未来都市構想</li>   <li>・ アルミ構造住宅による未来のライフスタイル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 構造材はMg合金として、 海水からの製錬を前提</li>   <li>・ 内装材、構造部材として提案</li> </ul>
<p><b>電気・機械</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>電力中央研究所</u></li>   <li>・ <u>未来味ッット技術研究センター</u> (千葉工業大学)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 電化社会、グリーン化社会</li>   <li>・ ロボットの現状と未来</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 電気利用技術開発と普及</li>   <li>・ 軽量化 (構体、部品)</li> <li>・ 安全性確立</li> </ul>

## Ⅱ－３ アルミニウム需要統計

### (1) 現状整理

- ① 2009年日本の総需要は過去にない落ち込みとなったが、現状は回復基調である。
- ② 全世界のアルミニウムの消費量は今後も増加が予想される。
- ② 特に2000年以降の中国での伸びが大きく、欧州全体でも増加している。
- ③ 一方、日米は2000年以降停滞状態である。
- ④ 人口1人当たりのアルミニウム消費量で見ても、中国と欧州は増加している。
- ⑤ 人口1人当たりのアルミニウム消費量で見たとき、1980年までは米国での消費量が多かったが、1990年以降では日米がほぼ同等であり、我が国は人口1人当たりで見ると世界最大のアルミニウム消費国である。

### ⑥ 用途別日米比較（上位4用途）

日本：輸送、建設、金属製品（箔、PS版）、食料品

米国：輸送、容器包装、建設、輸出

（輸送関係が共通してトップ、日本は高品質の金属製品が、また米国では容器包装分野でのアルミニウムの大量使用とコスト競争力を生かしての輸出が特徴的。）

### ☆日本の開発製品☆

これまでに多くの世界NO. 1製品やオンリーワン製品を生み出してきたが、そのいくつかを紹介する。

### 《JAA世界NO. 1、オンリーワン製品》 \* JAA：日本アルミニウム協会

アルミ熱交換器、アルミ新幹線車両、PV電極、バックシート、LIBケース・正極、アルミ缶、HD基板、アンテナ、電波方式個体認識（RFID）、感光ドラム 等

### 《開発中の製品》

- ① JAA：燃料電池車（FCV）水素タンク用Alライナー：NEDOプロジェクト 2003～2009年  
水素用アルミニウム材料評価・開発：NEDOプロジェクト 2010～2011年
- ② 物質・材料研究機構：アルミ陽極酸化不揮発メモリー：文科省元素戦略 2007～2011年

### (2) 今後への期待

日本のアルミニウム産業は、これまで欧米からの技術導入により発展してきたが、人口1人当たりで見ると、すでに米国と並び世界最大のアルミニウム消費国である。今後は世界をリードする独自の材料開発、用途開発が望まれる。また、コスト競争力を向上させる工夫が必要である。

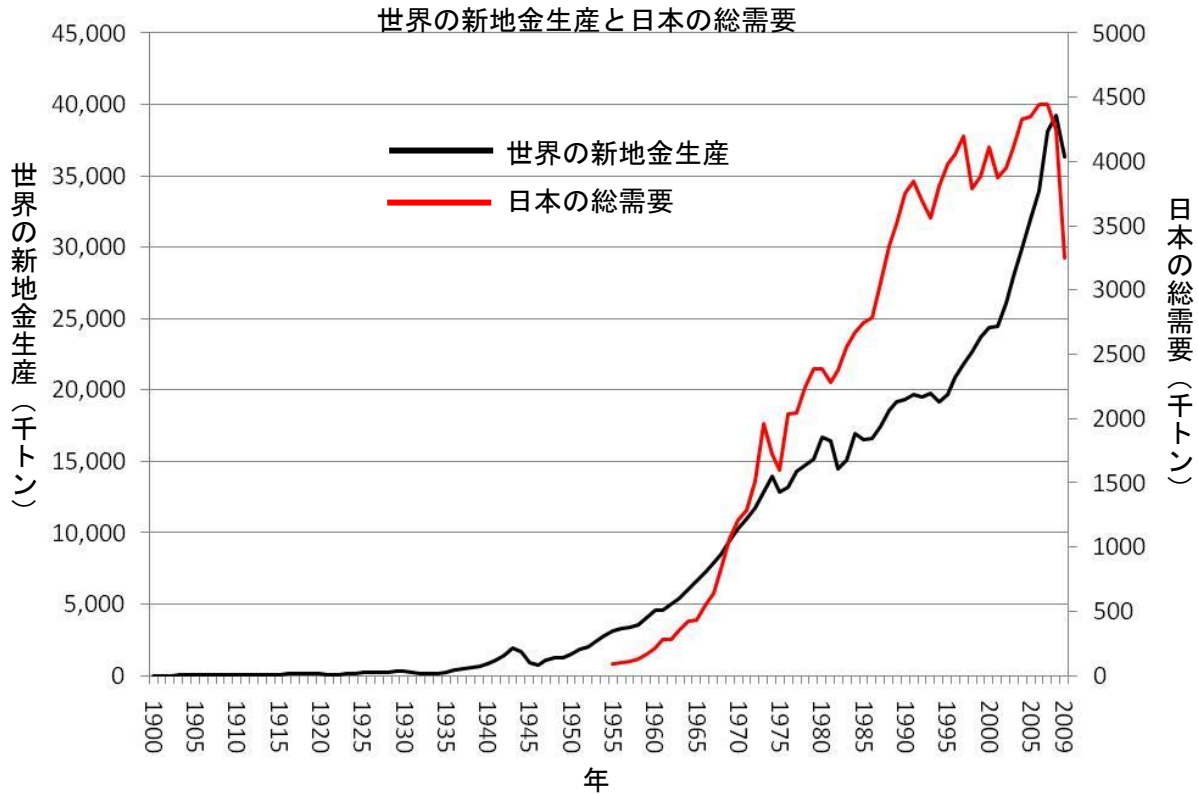


図1 世界の新地金生産と日本の総需要

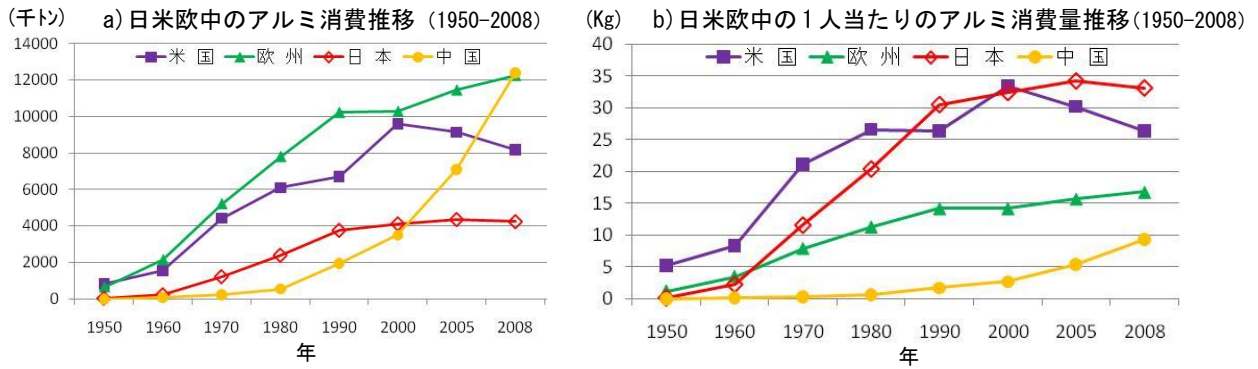


図2 アルミニウム消費量の日米欧中の比較

出典：Metal Statistics 1997-2008 World population prospects、世界人口白書、総務省統計

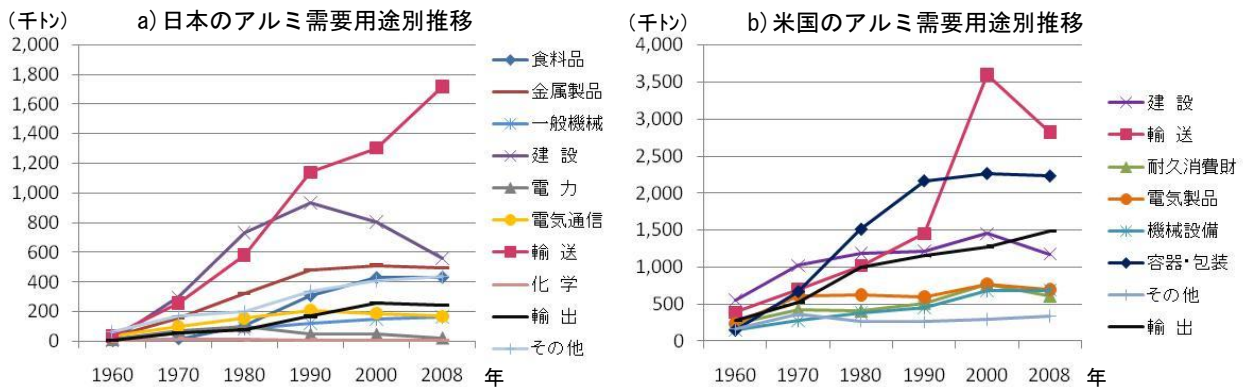


図3 日米のアルミニウム需要用途別推移

出典：日本アルミニウム協会統計年表、米国アルミニウム協会統計年表

## II-4 アルミニウム産業の課題

今後の低炭素社会、資源循環型社会、安全・安心社会への貢献と適応分野を考える。

### (1) 材料技術開発

- ①日本のアルミニウム産業は、製錬事業からは遠くなったが、低コスト製錬技術の確立は長期的課題であり、新技術・極限的技術の開発に手掛かりを見つける。
- ②元素戦略および資源高騰・枯渇への状況から、アルミ合金の添加元素の低減を先取りした形で、超軽量・高強度部材開発を、世界に先駆けて実行することが必要である。また枯渇的要素であるCu代替、SUS代替、Zn代替の商品へのアルミニウム展開も図る。
- ③展伸材から展伸材（サッシからサッシ、自動車から自動車）へのリサイクルを推進する。

### (2) 製品・用途開発

自動車産業の電化の構造変化を睨んで、車体、ボディーの超軽量・高強度部材の要求はさらに強くなるとともに、新たな部品への提案が求められる。バルク材の新用途開発として、アルミ建築構造材、土木構造材、海洋構造材等、アルミニウムの特徴が活かされた社会インフラへの展開を積極的に推進する。電気電子・半導体・情報通信・光学領域等において、機能性部材としては世界一のアルミ部材が多い。更なる付加価値の高い機能性部材で世界初、世界一の展開を図る。省エネ効果の大きいLED照明の基盤材料としての地位を確立する。以下にアルミの適用が期待される分野、用途を挙げる。

#### ①自動車

- ・電気自動車：モーター、IGBT、電池、車体、ワイヤーハーネス等

#### ②住宅・土木・建築

- ・オールアルミ住宅：200年住宅、CO<sub>2</sub>ゼロ住宅とゼロエミッション住宅、PV
- ・建築・土木等の社会インフラ：超高層ビル、耐震ブレード、橋梁、未来都市

#### ③灯り

- ・LED照明：放熱部材、LED基盤

#### ④家電

- ・オールシーズン空調システム
- ・超大型映像機器、ネットワーク化（高速通信網）
- ・ホームセキュリティシステム

#### ⑤エネルギー

- ・原子力
- ・再生可能エネルギー：太陽電池・太陽熱、水力、波力、潮力、風力等
- ・蓄電池：LIB、NAS電池、レドックスフロー電池等
- ・燃料電池：固体高分子型燃料電池（PEFC）、固体酸化物型燃料電池（SOFC）
- ・超伝導

#### ⑥ロボット

- ・構体
- ・電池（動力源）

⑦食

- ・植物工場
- ・緊急時保存用食糧容器

⑧半導体

- ・半導体製造装置、高純アルミターゲット

⑨情報通信

- ・センサーネットワーク、ユビキタスアンテナ、RFID

⑩医療・介護・バイオ・健康

- ・コンピュータ断層撮影（CT）、核磁気共鳴画像法（MRI）、医療・介護用ベッド、介護・福祉ロボット

## II-5 未来のアルミニウム産業に向けて

### (1) アルミニウム業界共通の基盤技術開発

#### (1) - 1 添加元素（Mg、Mn、Zn、Cu）低減合金の開発

ナノ組織制御による引張り強度と伸びをバランスさせた超軽量、高強度部材の開発を目指す。またユビキタス元素（Si、Fe等）ベースの部材開発を行い、用途モノアロイ化（6000系合金）への布石（Mg、Mn、Cu、Zn低減）とする。

目標 2025年：従来の限界を越えた500MPa～30%の軽量・高強度部材の開発

2035年：800MPa～40%の軽量・高強度部材の開発

#### ① ナノ組織制御でのブレイクスルー

- ・D-S S F（Deformation -Semi Solid Forming）プロセス（里：東工大）
- ・水素化脱水素化による微細組織化（文科省元素戦略 2007～2011年：東北大）

#### ② 強歪加工プロセス開発によるブレイクスルー（堀田：九大、向井：物材機構）

- ・溶解／ダイキャストプロセス
- ・押出プロセス～捻り押出
- ・圧延プロセス～溝圧延
- ・超高圧せん断～E C A P（Equal Channel Angular Pressing）、H P T（High Pressure Torsion）など

#### ③ 外部力による組織微細化

- ・急速冷却
- ・電磁力
- ・超音波

#### (1) - 2 新溶解鑄造法の開発

省エネと溶解ロスの低減を目指した、新たな溶解法と非金属介在物ゼロを目指した新たな耐火コーティング技術を探索する。

- ① 炉の省エネ：1/5～1/20にする。

- ② ドロス低減溶解：1/5～1/10にする。
- ③ 耐火コーティング技術：非金属介在物ゼロ

(1) - 3 他の材料との融合

他材料との融合により高機能、新機能の発現を目指すとともに、低コスト化を探索する。

- ① 複合材料  
アルミ粉末とカーボンナノチューブ（CNT）：強度3倍・高熱伝導性  
独）パイエルとALCAN：1000MPa
- ② 摩擦攪拌接合（FSW）での異種材料接合

(1) - 4 半熔融技術の活用

半熔融技術の活用による高性能材料開発の可能性を探索する。

- ① チクソ・ランナーレス射出押出技術（三輪：産総研）
- ② チクソ展伸材DSSF（里：東工大）Fe1%含有高強度材

(1) - 5 連続プロセス化

双ロールキャスター（熊井：東工大）によるFe、Mn含有率増加合金の実用化を目指す。  
（Fe無害化、高強度化）

(1) - 6 アルミニウムの安定ソース確保

低コスト原料の安定確保を目指して、新製錬法開発に向けた探索を行う。

- ① 極低酸素雰囲気によるアルミニウム直接還元（池田：産総研）JAA2008年～

(1) - 7 リサイクル合金分別技術

展伸材から展伸材へのリサイクル技術開発に取り組む。

- ① アルミニウム新リサイクル技術開発事業 JAA2009年 NEDO事前研究。  
2010～2012年 NEDO実用化開発研究実施中。

(2) アルミニウム業界進化のための技術探索

性能向上や新規機能を付加しアルミニウム材料の進化を目指した技術探索を行う。

- ① 機能材：熱伝導性、電気伝導性、非磁性、光反射性、化学的腐食性、  
ガスバリアー性（水蒸気、水素、・・・）など
- ② 機能性発現：ナノ、生体融合、光物性など
- ③ 材料融合：ナノ材料、セラミックス、プラスチック、異種金属など



☆調査テーマ☆

現在調査中または助成中の技術テーマを以下に示す。

≪2010年調査テーマ≫

- ①アルミ陽極酸化被膜を用いた次世代不揮発性メモリーの開発  
元素戦略プロジェクト（2007～2010 NIMS）
- ②水素熱処理によるAl、Cu基等合金のナノ結晶粒化と特性の向上  
元素戦略プロジェクト（2007～2011 東北大学）

≪2010年 中長期委員会研究助成テーマ≫

- ①Al-Fe第2相の超微細分散方法の開発と開発材料の諸特性の評価（東工大、九州大）
- ②純アルミ系高導電材料の高圧巨大ひずみ法による高強度化の研究（九州大）
- ③アルミ酸化膜による不揮発メモリーの開発（日大）

≪2010年 アルミニウム研究助成テーマ≫

- ①2009年からの継続テーマ：7件
- ②2010年新規テーマ：13件

II-6 人材育成・社会への仕掛け

アルミニウム材料立国を支える、新教育システムを構築する。

- 経済産業省委託事業 JRCM&JAA：2007～2009年  
製造中核人材育成プログラム作成と実証
- 日本アルミニウム協会：2010年 アルミニウム産業中核人材育成講座開講  
「溶解鑄造」、「熱処理」、「力学の基礎」、「加工（圧延・押出）」の4コース

### Ⅲ. アルミニウム技術戦略ロードマップ

#### Ⅲ-1 ロードマップ作成のコンセプト

日本はこれから低炭素社会、循環型社会、安全・安心の社会の実現を目指す。アルミニウムを、その一役を担う材料に位置づけるべく技術戦略マップの実現の道筋(ロードマップ)を作成した。2009年版を初版として、今後、アルミニウム協会を中心に定期的に見直しを実施する。

アルミニウムは、環境負荷の小さい、軽量化構造を実現する高強度素材の提供、製品開発/製造/リサイクル(PPRサイクル)の完全循環型素材として確立し、様々な顧客製品に対して、信頼性の高い、構造素材であることが必要である。この未来のアルミニウムの姿を実現するために、次の3つの大きな柱を中心にロードマップに展開した。

##### ① 材料技術・組織制御技術の確立

使われる目的に最適な金属組織を、事前にその組織を設計し、その設計どおりに製造できるプロセスを確立する。出来上がる材料は、添加元素を枯渇元素からユビキタス元素(Fe、Si)に代替する合金設計でかつ高強度、高靱性/高成形性(高伸び)を有する。

##### ② リサイクル、リユース技術の確立

回収と再生の技術の確立により、アルミニウムの完全循環型社会を実現するため、現状の総需要450万トンに対して当面75万トン回収を増加させることを目指す。

##### ③ 利用拡大技術の確立(アルミニウムの性能改革による新たな可能性の開拓)

これまでの統計データでも分かるように、国内でのアルミニウム需要の拡大には、新しい需要分野の開拓が不可欠である。その需要拡大には、新しい性能の改革が必要である。アルミニウムを構造材料のファーストチョイス素材とするために、品質や付加価値の向上とコストバランスを併せ持つ、革新的なものづくり技術を確立する。その結果として、2035年で200万トン/年の需要増を設定する。

このアルミニウムの将来像を実現するために、大分類を更に要素技術まで分類しそれを確立するロードマップを検討した。

図4、図5に全体のコンセプト図を示す。

# アルミニウム産業のエコロジーモデル構築

アルミニウムの完全ライフサイクル化(循環型社会への貢献)

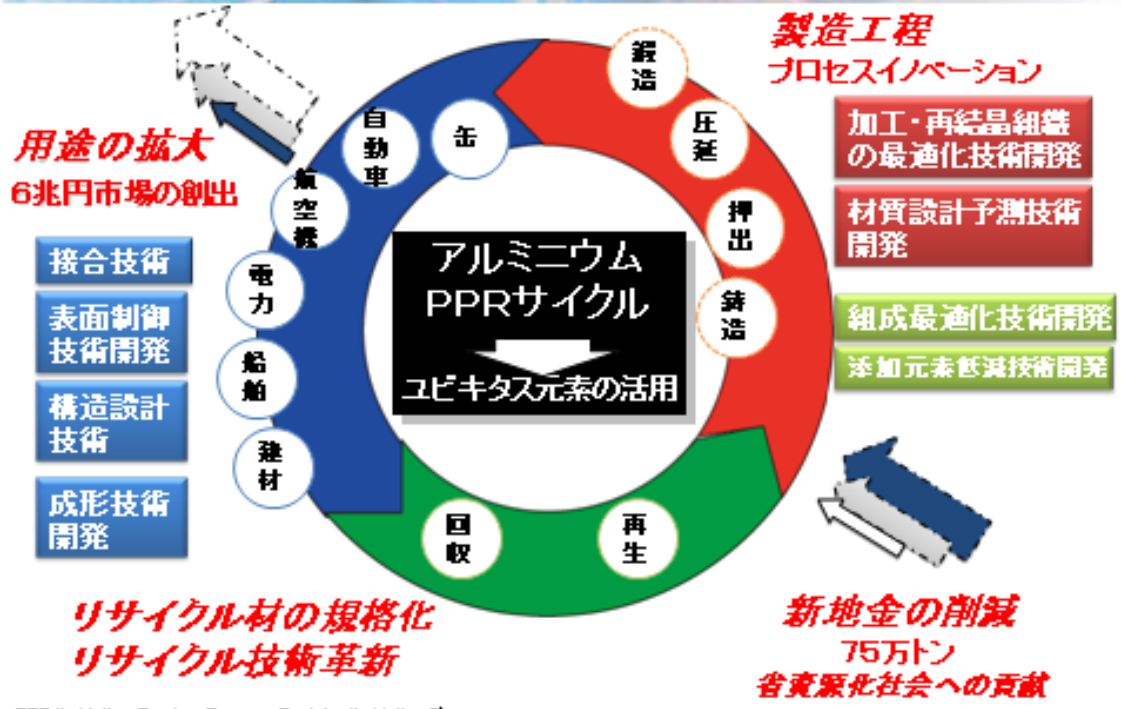


図4 アルミニウム産業のエコロジーモデル構築

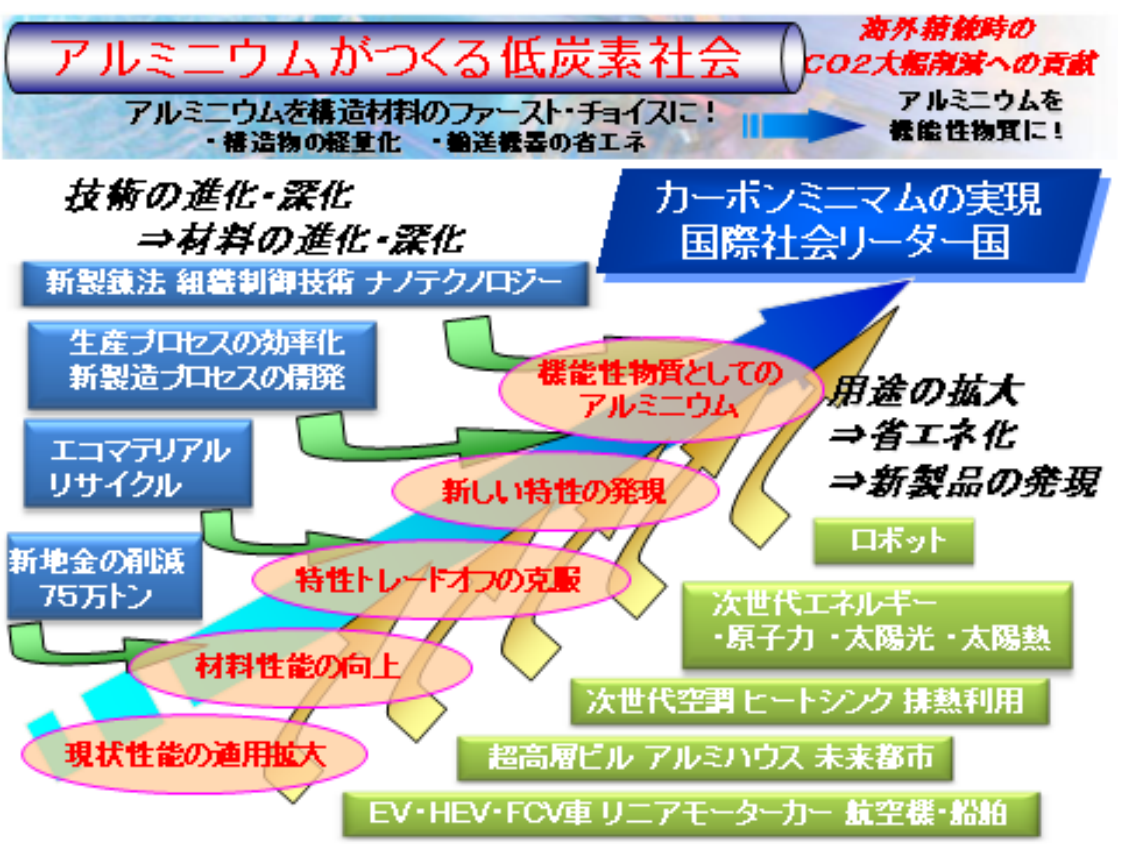


図5 アルミニウムが作る低炭素社会

### Ⅲ-2

ロードマップの詳細は公開しないが、具体的なアクションの参考とすべく、いくつかのシナリオで検討した。